

■ 書 評



本当の依存症の話をしてしよう —ラットパークと薬物戦争—

スチュアート・マクミラン
漫画, 松本俊彦, 小原圭司
監訳・解説文, 井口萌娜 訳
星和書店
2019年1月 120頁
本体価格 1,500円+税

マンガである。歴史ある精神神経学雑誌において、書評にマンガが取り上げられたのは、これが初めてではないだろうか？

ちなみに書評子がいる宮城県では、故・石ノ森章太郎先生の遺志を継ぎ、マンガは「萬画」と書く。石森プロの公式ホームページによれば、「萬画」は万画（よろずが）で、あらゆる事象を表現できる。また、萬画は万人の嗜好にあい（愛されるし、親しみやすい）、無限大の可能性をもつメディアであるという。この定義によれば、本書はマンガや漫画などではなく、まさしく「萬画」とするにふさわしいと思う。それゆえ書評子は、以降、本書を萬画と記したい。

まず本書の表紙を見ると、タイトルの「本当の依存症の話をしてしよう」が大きめの字で、副題の「ラットパークと薬物戦争」がやや小さな字で書かれている。また、本書の主演である鼠（ラット）とミルトン・フリードマンの似顔絵イラストが描かれている。さらに赤い帯には、「これが依存症の正体だ！」と大書されており、地味な表紙の印象が強い出版元（星和書店）の書籍のなかでは、特に目を引くものではないかと思われる。

本書のメインとなる2つの萬画を描いたスチュアート・マクミラン氏は、豪州在住の社会派萬画家である。前半の「ラットパーク」では、1950～1960年代のラットを1匹ずつケージに隔離して施行されていた薬物依存症のモデル動物実験に疑問をいだいたブルース・アレクサンダー教授らの、革新的な研究について紹介されている。ラットパークと名付けられたラットにとって過ごしやすい環境のなかでは、ラットは薬物依存症に陥らなかったという彼らの研究結果が、萬画という表現媒体を駆使して余すところなく描かれている。こ

の手のストーリーは、おそらくは文章でも書けるのであろうが、萬画で表現することにより、より理解が深まる内容となっている。後半の「薬物戦争」は、ノーベル経済学賞受賞者にしてニクソン大統領の選挙アドバイザーでもあったミルトン・フリードマンが町中を歩き、1920年代の米国で施行された禁酒法の時代の反省を語りながら、ニクソンが宣言した「薬物戦争」と薬物禁止法を批判した内容である。こちらも、萬画でしかできないであろう表現方法を用い、読者の頭にすっと入ってくる内容となっている。

いずれも、現在の専門家の間では常識と考えられているが、わが国のマス・メディアや政府関係者、一般国民の多くは知らない内容であろう。薬物と薬物依存症の真実、禁止法の弊害は、専門家以外の多くの国民が知らない、知らされていないことなのだ。だから、「ダメ。ゼッタイ。」などという、専門家に言わせれば頓珍漢なフレーズを政府が率先して広めることになる。そういった意味でも、旧態依然とした思考回路をもったマス・メディアや政府関係者にこそ読んでもらいたい萬画である。むろん、薬物依存を専門としていない精神科医にとっても、古い誤った知識をアップデートできる情報も多数掲載された良書である（恥ずかしながら、書評子もこれまで誤解していた点がいくつかあって、非常に勉強になった）。監訳者の解説を含めても2時間程度で読了できるのは、萬画の利点である。作者のスチュアート・マクミラン氏は、まだ35歳の若さだという。今後の彼のさらなる活躍に期待したい。

監訳者のお一人の松本俊彦先生は、薬物依存症に関して古い誤った知識しかもっていない社会やマス・メディアを相手に、日夜、戦っておられる新進気鋭の研究者である。奇しくも今月号の本誌（第121巻12号）に松本先生が薬物依存とホームリダクションに関する優れた総説論文を寄稿されている。松本先生の総説論文と並行してこの萬画を読むことにより、依存症に対する理解が相乗的に高まるはずである。

また、本誌で編集事務局のお仕事をされている小原圭司先生のギャンブル依存症に関する萬画の解説も一読されることをお奨めする。

(山田和男)